

## 浄土三部經の施設学的考察

——主としてその聴衆について——

### 山本啓量

一 施設は *paññati*, *paññāpiti* の訳である。大乘に於て

仮と訳され原始仏教では施設とされている。仮は虚仮の義と至る・至すの義がある。*paññati* は知らしめるの義であるが、知行合一の義よりすれば知らしめるは至らしめると同義となる。即ち施設には知らしめると至らしめるの義があるのである。日常語としての「福祉施設の中の老人施設」の用法は老人を福祉に至らしめると理解することが出来る。

原始仏教における施設の統一的表現は、人施設・入処施設・法施設の三施設に於て見る事が出来る。人施設では随法行乃至俱解脱の七聖の昇進過程が設定されている。入処施設は六内外入処における根境によって六識を生じ、根境識三事とせられる。法施設は三十七道品に四禪を配した実践上の設定である。原始仏教の解脱涅槃は三十七道品を修習して、第四禪に於ける捨念清淨の一性の捨を捨する事によるとせられ、不彼作性に基つき法自然によって涅槃に至るのである。

浄土教に於ては此の事実に即して、乘仏本願が説かれる。

浄土三部經は、この三種施設に相応せしめる事が出来る。

阿弥陀經は衆生濟度の主体としての阿弥陀如来と莊嚴浄土の設定である。觀經は定散二善の觀想による凡夫往生が示され、信に基づく教我思惟・教我正受に應ずる真身觀の觀想の認識成立が示され、原始仏教の触の正觀に相応する。壽經に於ては仏行としての仏の本願に乗ずる凡夫衆生の願行が示されている。中阿不思經には、「法自然にして修習する過程を示して、「持戒は不悔・觀悅・喜・止身・覺樂 定心に至らしむるに非ず。」とし、法自然に基づく持戒乃至覺樂に至らしめ、「法自然にして定あれば如実を見、如真を知る。」「法自然にして如実如真を知見すれば無欲を得。」「法自然にして無欲あれば一切の婬怒癡を解脱する。」とあり。法自然にして戒定慧三学を修する事が解脱涅槃に至るとあり。

原始仏教の解脱涅槃の教説を代表するものは、空・無相・無類の三三昧と三解脱門である。之は阿弥陀經・觀經・壽經

の三部經に相当する。空は我我所を空する事である。阿弥陀經は浄土の依正二報を信じ一心の念仏を説くが、之は空に相当し、觀經の觀想は真身觀を中心とし無相に相当する。壽經の乘仏本類は無願に相当するのである。

二 阿弥陀經は浄土の依正二報の莊嚴を説いて浄土往生の義を明らかに示すものである。聽衆は千二百五十人は皆大阿羅漢である。經の聽衆の十六大弟子の初に舍利弗・摩訶目犍連・摩訶迦葉の三聖弟子が置かれ、世尊の説法は舍利弗を対象とせられ、舍利弗は經の聽衆を代表すると言へる。次に掲げられる文殊師利法王子・阿逸多菩薩・乾陀訶提菩薩・常精進菩薩と釈提桓因等の諸天大衆は佛法興隆と守護の義を有する。十六大弟子は仏弟子中最優秀にして、阿弥陀經の教説を知らしめられて菩提の成就に趣向するものであり、四菩薩は仏の本願力に依じて知らしめるの立場に立つのである。即ち十六大弟子と四菩薩との配置は、浄土往生を成就せしめる仏の本願と衆生の乘仏本願との施設學關連を表現する。

十六大弟子の初頭の舍利弗・摩訶目犍連・摩訶迦葉は三聖弟子として重要な統一の意義を表現する。即ち舍利弗は智慧第一、目連は神通第一、迦葉は頭陀第一と称せられる。神通は天眼・天耳・他心・宿命・如意・漏尽智の六通であり、漏尽智通は無学の聖者によってのみ得られ、通は智通の義であり慧と相応するが神通は根本静慮により起され定を基体に置

くのである。頭陀は身心を清浄に修治する事であり、貪欲・瞋恚・愚癡の三毒を棄捨するを言う。頭陀行は衣食住に相当せしめられ、比丘の日常生活における規範である。

三聖弟子に続いて摩訶迦旃延・摩訶俱絺羅・離婆多・周利槃陀伽の五弟子が挙げられる。増一阿弟子品によれば、摩訶迦旃延は論議第一であり、摩訶俱絺羅は四弁才を得得無解中の第一、離婆多是坐禪入定して心錯乱せず、周利槃陀伽は形体を化して世と殊異するとあり。難陀は端正にして諸根寂靜・心變易せずとあり。六根清浄なるは戒行に相当する。之等五大弟子は三聖弟子の根本的全体的なるに對して、具体的に表現されている。十六弟子中後半八弟子中の最後の薄拘羅と阿菴樓駄を除いて他の六弟子は前掲五大弟子に比して一層人間生活に即した三學の行徳を具している。

阿難陀は時を知り物を明らかにし、所至に疑無く所憶忘れず多聞広遠奉上に堪任す。(慧)

羅睺羅は禁戒を毀らず誦読して懈らず。(戒)

橋梵波堤は天上を樂しみ人中に処らず。(定)

寶頭盧頗羅隨は外道を降伏し正法を履行す。

迦留陀夷はよく勸道して人民を福度す。

摩訶劫賓那は星宿を曉了し預め吉凶を知る。

とあり。前半は定慧に相当し、後半は日常生活に即した施戒であり広義の戒行に属する。

阿彌陀經の聽聞衆が以上の様に三聖弟子を始めとし、戒定慧三學に配せられるのは、浄土の教が三學を超えるものであり、法然上人の三學の器に非ずとするに應ずるのである。

三 觀經の聽聞衆については、「大比丘衆千二百五十人と与なりき。菩薩三万二千あり、文殊師利法王子を上首となす。」とあり。文殊菩薩を上首となすとするのは、壽經の「皆普賢大士の徳に遵えり。」とするに應じている。文殊普賢は積尊阿脇士である。觀音勢至に相応し、文殊は智慧に普賢は慈悲に相当する。觀經に於て文殊を上首と稱したのは、韋提希に対する濟度の施行は、智慧のみに依らず根底に慈心を置いて、智慧と慈悲の總合によるべき事が示されている。

之等の聽衆は經中に説かれる韋提希の一身上の物語と、韋提希の教我思惟教我正受と請願し、世尊が之に應えて説法せられた定散二善の教法を聽聞する。直接の聽聞者は韋提希であり、之に關連する者に目連があるが、根本的には阿難が未來世一切衆生の煩惱の賊に害せられる者の為に、聽聞するのである。定散二善の説法の中に、「仏韋提希に告げたまう。」と「仏阿難及び韋提希に告げたまう。」との二種あり。韋提希のみを対象とするものは定善の日想と水想と宝地の三觀で、他は皆阿難と韋提希を対象としている。觀經の説かれた根本的な趣旨は次の中にあり、「如来今未來世の一切衆生の煩惱の賊に害せられる者の為に清淨の業を説かん。善い哉韋

提希よくこの事を問えり。阿難汝當に受持して広く多衆の為に仏説を宣説すべし。如来いま韋提希及び未來世の一切の衆生をして、西方極樂世界を觀ずることを教えん。」あり。即ち韋提希の悩苦に基づき、阿難を介し未來世一切の衆生をして浄土の莊嚴を觀想せしめ、「汝は是れ凡夫にして心虚羸劣なり。未だ天眼を得ず。遠く觀する能わず。諸仏如来に異の方便あり。汝をして見ることを得しめん。」とあり。觀は主体により見せしめられて觀するのであり、見は対象の凡夫の爲作である。韋提希は未來世一切衆生を代表する。

韋提希幽閉せられ愁憂憔悴し世尊に対し、  
我れ今愁憂す。世尊は威重くして見たてまつるを得るに由なし。  
願わくば目連・尊者阿難をして我が爲に相見えしめたまえ。

と請願したるに世尊は韋提希の所念を知り、  
大目犍連及び阿難に勅して空より来らしむ。仏は耆闍崛山より没して王宮に出でたまう。

とあり。之に対し仏が目連と阿難をして空より来らしめたまうに、

世尊釈迦牟尼仏は身は紫金色にして百宝の蓮華に坐し、目連は左に侍し阿難は右に在り。

とあり。目連の神通は慈悲に相当し、阿難の多聞は智慧に相当せしめれば、彌陀觀音勢至の來迎に相当するのである。

四 無量壽經の聽衆の三十一大弟子は、五群比丘、五人の

長者、三迦葉、四聖の弟子と次第せられ、大住・満願子・仁性の論議と説法と解空を中心とする三学相応の大弟子が挙げられている。五群比丘と五長者の子の帰依は世尊の教学の発端と展開を示し、三迦葉の帰依は事火外道の帰化を示し、四聖弟子は仏教の発達と完成を意味する。大住以下十四比丘の展開は、舍利弗・目連・摩訶迦葉の三聖が戒定慧の三学に相応せしめらるが、之に応じて大住以下羅睺羅に至る諸比丘は、大住の論議・満願子の説法・仁性の解空を慧の展開と考えて、三比丘を中心とし戒定慧の三学に相応せしめて三群に分別せられる。解空は慧の体得を示し、説法は慧に基づく対象への志向を表わし、論議は解空の法説に対する義説であり対象への作用である。即ち論議第一の大住が雜阿含に於て更触の法説義説を説き仏より称誉されている。

説法第一の満願子に続く離障・流灌・堅伏の三族姓子は共同の仏行生活を行い、阿那律（離障）が中心となり、世尊の問に答えて、四禪四処の禪定を思惟し滅尽定によって上人の法を得るとし、更に妙法有りとして四無量心によるとせられる。仏より有喜定・無喜定・捨俱行定を修する事を教えられた。三族姓子に続く異乗は実在の仏弟子で無く仮設されたものである。異乗 Pariyana は彼岸 Para と行路 Ayana の合語であり、到彼岸の義である。仁性乃至羅云の表現する戒定慧の三学を成就し、仁性の解空を基体とし論議と説法の義

を展開する。異乗は三学を超える事を表現する。寿経に展開する仏の本願を基体とする浄土教は三学を超えるが、異乗は異の設定に乗じて彼岸に至る事を意味する。

寿経の聴聞の菩薩は四種に分別せられる。

(1) 釈迦脇士の普賢・妙徴（文殊）の二菩薩。

(2) 慈氏菩薩等の此の賢劫中の一切の菩薩衆。

(3) 賢護菩薩等の在家の十六正士。

(4) 善思議菩薩等の出家の十四菩薩。

である。経に皆普賢菩薩の徳に遵えりとなり、觀経の文殊を上首と為すに对照的である。法蔵の發願は普賢の慈悲に同ずる。仏の阿那律の過去事に因る説法に対し、未來事に因る説法が、弥勒が賢劫の中あつて未來に成仏して世尊の教化を存続する。居家の菩薩の賢護は賢明な守護者の義、持地菩薩は大地の力を保持するの義であり、總じて居家の菩薩は世事に關連し出家の菩薩は解脱に關連し、共に衆生済度に応ずる。

諸菩薩衆が其の行願を実現する事を示し、光明を奮い魔をして知らしむ。魔を制するに智力を以て降伏せしむ。釈梵祈勸し転法輪を請す、仏法音をもて諸世間を覺せしむ。菩薩に記を授け等正覺を成ぜしむとし、降魔と成道と転法輪と入涅槃への施設が展開され、また法爾の道理により自然に往生することが示されている。

（石川県農業短期大学名誉教授）